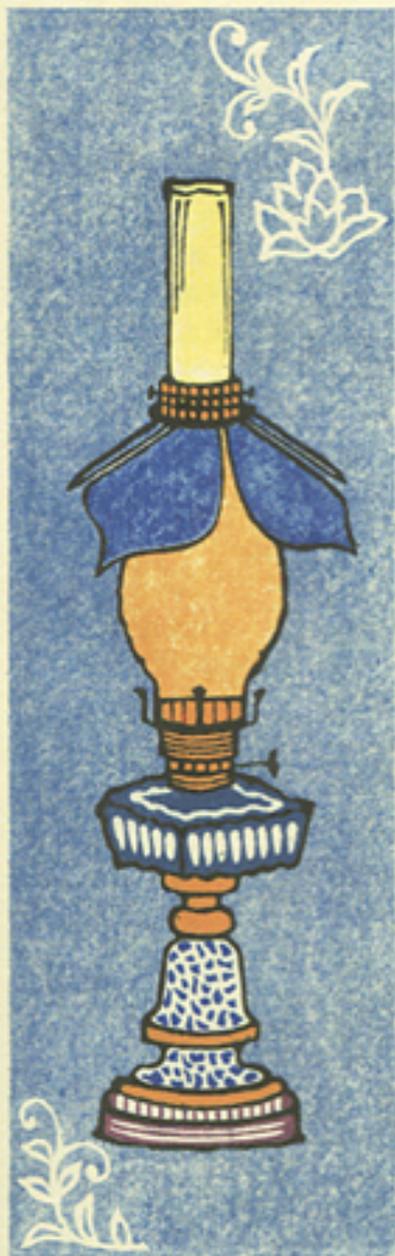


春燈

9月号

September 2012



主宰の句

安立公彦

炎天の己が影踏みこころ急く

蛇の衣形正して吹かれけり

短夜の早や月明の漁師町

こぼれ継ぐ南天の花敦の忌

師の枢軽かりし遠き梅雨の日や



墓出でて子の居ぬ家を賑はす

『午前午後』昭和四十二年

毎年敦忌が近づくと、一番手に優しい小豆色の鞆革の敦句集を繙く。長女が結婚後の作品である。敦先生は、墓を相手に子を愁ひ子を案じている。へ蜚籠月に一度は子に逢ひに〳と詠み、次第にへ後の月子の足遠くなりけり〳と詠まれている。庭の沓脱石に墓が現れば、家族のように親しみを持つて接している。挙句の果、老いたるは、墓でも飼えと、おっしやつている。

加藤 良子

でで虫や父の記憶はみな貧し

『暦日抄』昭和三十九年

この句に寄せて師が総代を務めた卒業式に正装でお父上が参列した時の会話を述懐されている。「大学に行きたかったのだろう。済まないね」と目をしばたいたのが最もさびしいお父上の姿だった。―私の父もほぼ同年同様の境遇でしかも何度も職を替えている。師と父を重ねてしまうことが多い。貧しくとも父子の礼節、温もりがあり、当時の家族はみな小さな殻の中で懸命に生きていた。

小泉 三枝

燈下集



○ 卯木 堯子

蠓蚊を避けたる母の日和下駄

パソコンの文字の羅列を渉る蟻

隠れん坊ポスト仄見え濃紫陽花

豆腐切るや采の目曲がる夏の風邪

使はねば減る香水も思ひ出も

○ 深川 敏子

万緑や少年直球投げ返す

父の日の大名庭園巡りけり

紫陽花の雨にひらくやフリル傘

夏の草みんなどで引いて七回忌 (夫の忌修す)

手兒奈靈堂の結界に湧く蛭かな

○ 和田 幸江

老鶯や湖いちまいの波の照り

洗ひ晒しのGパン乾く西日かな

つりしのぶ宅急便にするサイン

夕風や猫の見上ぐる金魚玉

反射神経にぶくなりたる田螺かな

○ 大室 恵美子

月下美人ひらきし音か空耳か

失恋の蛭かわれのでのひらに

夏草のはびこる島の滑走路

野仏と無言の対峙ほととぎす

連れ立ちて男は入れぬ白日傘

○ 尾野奈津子

江戸風鈴小気味よき音聞かせけり

スカイツリーの空の明るし夕立かな

荒神輿青海原に裸せり

万緑や丹色薄るる仁王門

虞美人草宿世を秘むる緋色かな

○ 寺村年明

茶柱のすつくと立ちて芒種かな

麦秋や兵たりし日のおけさ節

奪衣婆の無骨の指の薄暑かな

ながらへて病いとしむ虎が雨

立葵もう逢ふことのなき別れ

○ 小嶋恵美

夕星へ浜木綿未だ花解かず

サングラス外し淋しきことを言ふ

尺蠖や人は失意の膝を抱く

働きし手を見せ合うて祭かな

神輿追ふひよいと手馴れの尻端折り

○ 三宅文子

ひとつ葉や恋の式部の供養塔

千年の楠千年の青葉風

半夏生死者は生者の中に生き

大南風灣一望の那古寺かな

民宿の納屋に置かれし浮袋

○ 太田慶子

かがよへる植田はさみて立ち話

幸せのたとへば赤きさくらんぼ

薔薇挿して気持ばかりの先走る

風鈴や母呼ぶ夢に目覚めける

伽羅路を煮上ぐ夜の雨本降りに

○ 藤原繁子

蝸牛の豆粒がほど触れずおく

梅雨晴や口紅薄うして見舞ひ

鉾立てを見に行く約の即決す

ほろ酔うて祇園囃子の辻抜けたり

初蟬や鎮守の杜の大櫓

当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

「がんばつべ」と終はる電話や梅雨に入る
実梅煮てひと日とつぷり香にひたる

六月や近くて遠き導の灯

あぢさゐの毬にしばらく乳母車

朝顔市見物客とよまれけり

○ 神田恵琳

合歓咲くや夕べ門辺に子の名呼ぶ

己が詩の漂着の岸蚩とぶ

椎落葉音なく過ぐる日を捨つる

何気なく顔のぞかるる黒日傘

晚鐘や火蛾はしづかに移りをり

○ 齋藤晴夫

丘越えて谷をりをりに槐咲く

滾々とさ走る水や田を満たす

小山田の父祖の重ねし畦を塗る

芽立ちよく青の色濃き余り苗

風土記の丘夏至の日輪田毎おく

○ 藤原若菜

串打ちの若き職人薄暑光

藻屑蟹特売品とされ売らる

炎天や我が身を脱けてゆく何か

蛇の尾の暫し残れる葉群かな

声明の和して涼しき護摩祈禱

○ 土屋光男

羽越線駅弁ひらく青田かな

梅雨冷の酒田に訪ひぬ土門拳

吹抜くる青田の風や無人駅

山裾をまはる単線青田波

みちのくの分水嶺や雲の峰

春燈の句

安立 公彦選

踏むくや好みし夫の亡き今も

花櫛産土神に遠く住み

残照に燃ゆる渚や青薄

七夕や逢ひたき人の皆星に

学生に昼のひと刻花水木

軽鼻の子の親に倣ひて土手つつく

ベランダの仙人掌香る夜風かな

和紙の里闇の深きに河鹿鳴く

あやめ咲く土葬の父の上に咲く

アカシアの花の散華や水難碑

手を振つてオペ室に消ゆ妻涼し

梅雨の星人待つ駅の椅子固し

草蛭逢魔が刻の風ひそみ

弔電のなべて同文夏つばめ

広島 川崎 雅子

千葉 小淵二美江

長野 木内 博一

神奈川 宮崎 紗伎

荒梅雨や金箔光る仏具店

七夕の竹撓はする色の数

十葉の花攻めて来るせめてくる

豆御飯炊けたと喋る炊飯器

己が尾をためらひ引きつ蛇去りぬ

かざぐるま浜風纏ひ売られけり

棟梁の舌打ち聞こゆ戻り梅雨

方便てふ教へありけり仏桑花

緑陰に病みし話を問はれをり

岩風呂をのぞき見したる蜥蜴かな

青鬼灯触れてもみたり杖の先

梅雨に入る眼鏡とりどりかへてもや

しなやかに京の風生む京扇子

夏暁やスーパーに着く大型軍

三重 上野 進

神奈川 松田 千枝

埼玉 滝澤 千枝



余言

安立公彦

くじ運の悪さほとんど太宰忌

三上 程子

俳句作品における、行為、所作、思いなどの表現は、作者のものとするのが一般である。この「くじ運の悪さ」も作者のことと解すべきだろう。しかしこの句を通して読むと、上五中七の主人公があたかも太宰治その人であるような印象を受ける。

太宰忌は周知の通り六月十三日（昭和二十三年没）。この日山崎富栄と玉川上水に入水し、六月十九日早朝、通行人により二人の遺体が発見される。野原一夫の『回想太宰治』にはその時のことを含め、編集者として接して来た太宰への思いが感銘深く綴られている。

山崎富栄は太宰より十歳若く、父は日本で最初的美容学校を設立した人。昭和十九年物産社員と結婚したが、結婚十日ほどで夫は応召される。太宰の死を報ずる朝日新聞の写真(新

潮日本文学アルバム)には、三面記事のトップとして、「太宰治氏情死、玉川上水に投身、相手は戦争未亡人。書けなくなった」と遺書」とあり、富栄と太宰の写真が出ている。富栄は眼鏡を掛けた理知的な顔の人だ。

太宰治の死を、「くじ運の悪さ」と取るのは、山崎氏に対し失礼に当たる。しかしその三十九年の生涯を思う時、その死を含めて何となく太宰治というこの不世出の天才作家の、「くじ運の悪さ」を思わずにはおられない。

今年の太宰忌も三鷹の禅林寺のその墓碑には、若い太宰ファンからの沢山の供花が供えられたことだろう。

うしろより夜の濃くなる青葉木菟 井上 春子

この句を見ていると、夕暮の灯を消した窓辺に佇ち、迫り来る庭前の夜景に見入る作者の姿が浮かんでくる。

それを作者は「うしろより夜の濃くなる」と表現する。適確な夕暮時の写生である。遠く「青葉木菟」の鳴き声が聞こえる郊外の風景が感じられる。

ひとり戻る清しき梅雨の月のもと 菊池 螢子

詩情あふれる作品である。「梅雨の月」を読んでも湿潤さはいささかも感じられない。しかし再度読み返して、上五の「ひとり戻る」に立ち止まる。

聞くところによると、夫君が病床にあり、作者は夫君の介護と菊地画材店の仕事で多忙な日々を過ごされている。「ひとり戻る」は入院中の夫君を見舞つての帰りなのだ。ただ作品からはそういう気持ちの負荷は少しも感じられない。みごとな姿勢である。作者は木下夕爾先生の門下生。

あめんぼう水に写りし雲を追ふ

乗鞍 三彦

この句も抒情性の豊かな作品だ。牧歌的と言ってもよい。こういう句が浮かぶということは、余ほど気持が澄んでいないと出来ない。

「水に写りし雲を追ふ」の対象把握のみごとな。この句を見る私たちも、あめんぼうと共に、その水面に写る真白な雲の姿を追うような気持になる句である。

使はねば減る香水も思ひ出も

卯木 堯子

この「減る」は物理的な謂ではない。

「香水も思ひ出も」により、香水と思い出が一体として表現されている。「香水」は「思ひ出」を呼び、その「思ひ出」は香水とともにある。そういう「思ひ出」を作者は一見即物的とも思われる「使はねば減る」と表現する。しかしこの「減る」は反語である。

作者の胸中には忘れられない思い出が一つの香水と共に香り高く蔵されている。懐旧は時に人の心を浄化する。

子の声に高く揚げたり白日傘
どけつつ雲の散りゆく夕焼空

岩永はるみ

〃

前句。健やかな家族の日常の一景。わが子に呼ばれた若い母親が、挿している日傘を高々と翳す。かけ寄る子。或る人には往事を思い出すシーンであり、また或る人には今日の出来事だったりする。情感あふれる句である。

後句。「ほどけつつ」には、解けて離れる、迷いや疑いが晴れる、うちとけるなどの意味がある。この句、まさに一日の終りにほどけながら散りゆく雲の姿を良く描写している。空一杯の夕焼けが、明日の日ざしとそれを仰ぐ人びとの幸せを祝福しているようだ。

尺蠖の海を見てゐる枝の先

栗原 完爾

「海を見てゐる」がみごとだ。尺取虫は蛾の幼虫。枝に止まっているときは、あたかも枝から小枝が分岐したように斜めに立つ。子供の頃はその様が小枝から尺取虫か分からず触って驚かされることが多かった。

その尺蠖の枝に止まっている様子を「海を見てゐる」と表現する。海辺の光景にもいろいろあるが、尺蠖に目を与える発想は若々しい。俳句に限らず詩情の根幹は「発想の若々しさ」にある。断つておくが年齢に関りはない。